AGUIRRE
DER ZORN
GOTTES
アギーレ・神の怒り
フィツカラルド
KLAUS
KINSKI
FITZCARRALDO
EIN
FILM
VON
WERNER HERZOG
2000
COHJIZUKIN

ヘルツォークに狂う

映画を生きる男、ヴェルナー・ヘルツォーク

河原晶子（映画評論家）

ハーモニー・コリンの新作『ジュリアン』に出演し、アメリカのフォーク・ソングのレコードに合わせて奇妙な踊りをみせるヘルツォーク。三枝成彰氏のオペラ「忠臣蔵」の演出を手がけ、優雅な日本の伝統美を舞台にのせるヘルツォーク。怪優クラウス・キンスキーの撮影中の傍若無人を止めさせるために懐にナイフをしのばせるヘルツォーク。そしてワーグナーが大嫌いだといいながら、彼の音楽を自身の映画に使うヘルツォーク。

ヴェルナー・ヘルツォークとは、いったい何者なのだろう？じつは彼の素顔は、そんなさまざまなエピソードからは想像も及ばない、もの静かで優しいユーモアをたたえた知的な紳士である。その驚くべき矛盾。映画とその作り手のイメージの落差。私はこれまでに3度彼に逢ったことがあるが、そのたびに彼の穏やかな静けさに魅せられ、いったいこの男の何処にあの悪魔的なロマンと狂気が潜んでいるのだろうと思うのだった。それははじめて彼に逢った80年代の中頃と、そしてオペラ「忠臣蔵」の日本初演に来日した97年と、少しも変わっていなかった。

ヴェルナー・ヘルツォークの映画が世界中の多くの映画監督たちの映画から遠く隔たっているのは彼が映画を“作っている”のではなくて映画を“生きている”という感覚だ。映画を撮っている時、彼は自分が映画を作っているという意識などすべて忘れているにちがいない。人間が生の過程の中で多くの困難を超えて新しい体験を重ねてゆくように、ヘルツォークは映画を生きていくのである。たとえば『フィツカラルド』。アマゾンの上流から巨大な船を山越えさせるというフィツカラルドの野望は、ここでヘルツォーク自身の野望であり、彼にとっては映画を作ることが船の山越えそのものと同化してしまうのである。

「映画を作ることは絶壁を登るようなものだ。岩を登っていこうとすると、岩は人を振り落とそうとする。映画は映画を作ろうとする人を同じように振り落とそうとする」。83年のドイツ文化センターでのシンポジウムで彼はこんな発言をしている。超人ツァラトゥストラを夢みるニーチェ。あるいは幻の巨人＝風車に挑んだドン・キホーテ。ヘルツォークもまた、そんな誇大妄想の夢に取り憑かれた魂の冒険家なのだ。彼が“映画”とともに目指すのは、現実を超えた未知の世界への跳躍なのである。

アギーレ・神の怒り

Aguirre, der Zorn Gottes

©Werner Herzog Film Production / 1972年/ドイツ/93分/35mm/ビスタサイズ

[STAFF] 製作・監督・脚本：ヴェルナー・ヘルツォーク
撮　影：トーマス・マオホ
特殊効果：ミゲル・バースケイス
音　楽：ポポル・ヴー

[CAST] クラウス・キンスキー/ヘレネ・ロホ/ルイ・グエッラ/セシリア・リヴェーラ

アマゾンの奥地を目指してアンデス山脈の峠を越えるスペインの征服者たちの一隊を遠景ショットで撮ったオープニング・シーンに、画面を霧のごとくおおいつくしてゆくシンセサイザーの幽玄な響き！映画『アギーレ・神の怒り』とはじめて出逢った時のショックは今でも新鮮だ。72年に作られ、ニュー・ジャーマン・シネマの金字塔となったこの映画は、まず75年にパリで公開されて以来、日に日に観客の熱狂的な注目を集め、そうして83年、ついにやっと日本上陸を果たしたのだった。

ドン・ロペ・デ・アギーレ。彼は実在する人物である。1560年、伝説の黄金郷エル・ドラド発見のため、スペインの征服者である彼はアマゾンを下り、インディオの襲撃を受け、熱病と闘い、やがて“神の怒り”と立ち向かうことになる。西欧文明と汎神論的未開の地との宿命としての対決。どうしたって思い出すのは、フランシス・コッポラの『地獄の黙示録』、いいかえるならその原案となったコンラッドの小説、「闇の奥」のことである。実際、『アギーレ・神の怒り』はコッポラの『地獄の黙示録』に多大な影響を与えたといわれている（コッポラは具体的には語っていないが）。筏で川下りをするアギーレの一隊に立ち向かってジャングルから放たれる槍や矢。燃えさかる川べりの村。熱病と飢餓の中で狂ってゆくアギーレの部下たち。そうしてただひとり生き残ったアギーレは言い放つ。「これほど偉大なる反逆があるだろうか。“神の怒り”である俺は神話の通り我が娘と結婚して地上にかつてない大帝国を打ち立てるのだ。」カッと見開いたクラウス・キンスキーの瞳に、美しい狂気が、圧倒的な陶酔感が立ちこめる。ここでアギーレの娘を演じているセシリア・リヴェーラは、驚くべきことにクラウス・キンスキーの娘ナスターシャ・キンスキーに瓜二つなのである！

ヘルツォークはこの映画が描いたのは夢に現れるようなジャングル、そして人間の恍惚感だ、と書いている（ポジティフ誌）。彼は西欧の侵略という人間の歴史への告発などには目もくれようとしない。彼は映画史上稀なるこの“誇大妄想の男”アギーレと汎神論的宇宙との格闘に取り憑かれているだけなのだ。そうしてそんなヘルツォークの精神はクラウス・キンスキーの肉体を通して『フィツカラルド』や『コブラ・ヴェルデ』へと受け継がれ、さらには「彼方へ」の山に取り憑かれた男たちに姿を変えて生き続けてゆくのである。

フィツカラルド

Fitzcarraldo

©Werner Herzog Film Production / 1982年/ドイツ/157分/35mm/ビスタサイズ

[STAFF] 製作：ヴェルナー・ヘルツォーク/ルッキ・シュティペティック
監督・脚本：ヴェルナー・ヘルツォーク
撮影：トーマス・マオホ
特殊効果：フヴェルナル・エレミッチェラ/ミゲル・バースケイス
衣装：ギーゼラ・ストーナ　音楽：ポポル・ヴー

[CAST] クラウス・キンスキー/クラウディア・カルディナーレ/ホセ・レーゴイ/ポール・ヒッチャー

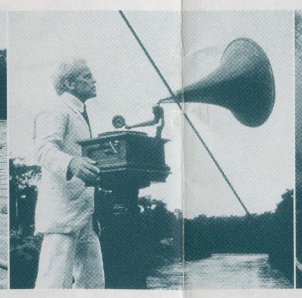
ペルーのジャングルの奥地にオペラハウスを建てるという途方もない夢を抱く“オペラ狂”フィツカラルドは、はるばるブラジルのマナウスへとカルーソーのオペラを聴きに行く。出し物はヴェルディの「エルナニ」（この場面を演出したのはヘルツォークの友人であるドイツの異端派映画監督ヴェルナー・シュレーターだ）。その終幕で虚空を指さしながら息絶えるカルーソーの姿に、フィツカラルドは彼が自分を指さしている！と狂喜するのである。ファナティックな夢想家フィツカラルド！演じるのはもちろん、『アギーレ・神の怒り』に続いてヘルツォークの近親憎悪的分身クラウス・キンスキーである。

『フィツカラルド』の彼は、さながら『アギーレ・神の怒り』の彼の、表裏一体を成す双生児である。『アギーレ・神の怒り』は限りない悲観主義者の。そして『フィツカラルド』は限りない楽天主義者の。そしていうまでもなく、そのどちらもがヘルツォーク自身のアンビヴァレントな二面性を象徴するのである。アマゾンの奥地にオペラハウスを建てるため、船を山越えさせるという奇想天外な夢を実行に移す彼は、襲ってくるインディオの威嚇の太鼓に対抗して、カルーソーのうたう「ラ・ボエーム」や「リゴレット」のアリアを蓄音機から響かせる。そしてオペラハウス建設の夢に挫折した彼は、その代わりにたった一度の船上でのオペラ上演を行う。ベルリーニの「清教徒」。実はヘルツォークははじめ、ここでワーグナーの”指環”四部作の中の「ワルキューレ」を考えていたのだという。ここでコッポラの『地獄の黙示録』の中に登場した<ワルキューレの騎行>を想い出してみるのは実に興味深い。ヘルツォークはかつてドイツ文化センターでのシンポジウムで「私はワーグナーが大嫌いだ、あんな醜い音楽はない」と語ったが、その彼がその後、『ノスフェラトゥ』や『彼方へ』、さらには湾岸戦争直後のドキュメンタリー『闇の教訓』でワーグナーの音楽を見事に使いこなしているのである。

彼の発言にはいつもそんな大胆不敵で誇大妄想的な挑発がある。彼は尊大な哲学者でもあるかのように私たちを挑発しながら、その心は純粋な子供のように澄みわたっている。フィツカラルドのそこはかとなく可愛げなユーモアは、ヘルツォークその人のものでもある。『アギーレ・神の怒り』が人間の本能を限りない悲劇へと誘ってゆくのに対して、『フィツカラルド』は人間の生命への限りない讃歌をうたいあげる。狂気と無垢な心。悲観主義と楽観主義。ヘルツォークを代表するこの2作品は、同時にヘルツォークその人の全存在を象徴しているのである。

配給　ケイブルホーグ　http://www.cablehogue.co.jp/

Aguirre, der Zorn Gottes



Fitzcarraldo

3/3(土)より連続ロードショー！

2/24(土)よりヘルツォーク特集先行上映！

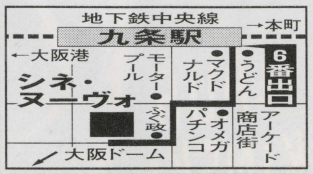
●4作品共通前売券1400円好評発売中！！（当日／一般1700円、学生1400円、高・中・小・シニア1000円）（上記4作品いずれか1本に使用可）

各回入替制	3/3(土)→9(金)		3/10(土)→16(金)		3/17(土)→23(金)		3/24(土)→29(木)
フィツカラルド	AM10:20よりモーニングショー				11:25	4:05	
アギーレ	――		PM8:45レイト		2:10	6:50	アギーレのみ PM8:45 レイト
小人の饗宴	3:00	6:50	1:05	4:55	〈3/17(土)→19(月)のみ〉	PM8:45	
キンスキー	1:05	4:55	3:00	6:50	〈3/20(火)→23(金)のみ〉	PM8:45	

ヘルツォーク特集上映
モーニングAM10:50／レイトPM8:45

生の証明	2/24(土)モーニング・3/5(月)レイト
蜃気楼	3/3(土)レイト
闇と沈黙の国	2/26(月)モーニング・3/4(日)レイト
カスパー・ハウザーの謎	2/27(火)モーニング・3/6(火)レイト
シュトロツェクの不思議な旅	3/1(木)モーニング・3/8(木)レイト
ガラスの心	2/28(水)モーニング・3/7(水)レイト
ヴォイツェック	3/2(金)モーニング・3/9(金)レイト
コブラ・ヴェルデ―緑の蛇	2/25(日)モーニング

当日600円均一
主催／関西ドイツ文化センター、ヘルツォーク特集上映実行委員会



地下鉄中央線「九条駅」6番出口徒歩2分
シネ・ヌーヴォ
TEL.06-6582-1416
〈シネ・ヌーヴォのホームページ〉アドレス
http://terra.zone.ne.jp/cinenouveau/